

Better Care

89

2020
Autumn

秋

特集

— 新型コロナウイルスが問いかけるもの —
覚悟としてのACCP

感染症ともがんとともに暮らす時代。

紅谷浩之 [オレンジホームケアクリニック代表・在宅医療専門医]

インタビュー: 中澤まゆみ [ノンフィクションライター]

生命は次なるステップへとつながっていく。

対本宗訓 [医療法人健永会大館記念病院理事長・院長/僧医]

QOLを落としてまで長生きしたくない。

中村仁一 [医師・「自分の死を考える集い」主宰]

死の話題をタブーにしない。

花戸貴司 [東近江市永源寺診療所所長]

早い段階から最後の過ごし方を問う。

里村佳子 [社会福祉法人呉ハレルヤ会呉ベタニアホーム理事長]

家族のすべき介護は、マネジメント。

川内潤 [NPO 法人となりのかいご代表理事]

認知症になっても笑顔で生きていかれる。

丹野智文 [おれんじドア実行委員会代表]



滝沢市 [岩手県]
所沢市 [埼玉県]
上島町 [愛媛県越智郡]

介護
百人百色の

対談

自分の人生を自分でつくっていく。

西村良彦 [画家・「楽心庵」主宰]

浜田きよ子 [高齢生活研究所所長]



新型コロナを前提に 利用者の暮らしを守り 早い段階から最後の過ごし方を問う。

里村 佳子 [社会福祉法人呉ハレルヤ会呉ベタニアホーム理事長]



さとむら・よしこ ● 1955年、広島県生まれ。広島国際大学臨床教授、前法政大学大学院客員教授を歴任。乞われて現社会福祉法人呉ハレルヤ会の立ち上げから参加、1998年、ケアハウスとデイサービスを開設。その後、仕事をしながら大学院に進学し、MBAを取得。法人内施設の担当理事などを経て2019年より理事長。2017年、東京・杉並に訪問看護ステーション「ユアネーム」を開設。WEBサイト「ニュースクラ」にコラムを連載中。著書に『尊厳ある介護——根拠あるケア』が認知症介護を変える。(岩波書店)がある。

関係性を切り離さない

この春以降、介護関連事業者は、難しいところに立たされてきた。

「まず、2月下旬からグループホームで面会制限を始め、感染拡大に伴い、3月に入って緊急時以外の面会を禁止にしましたが、早期から、この状況は長引きそうだと考えていました」

里村佳子さんは、呉市のまちなかにある社会福祉法人の理事長。全体の基本対策を決定し、実行する責任がある。

「長い間、面会でできない事態は、新型コロナ対策としては必要なこととしても、介護を必要とする高齢の方々には、さまざまな問題をもたらすとも考えられます。まず、いままで頻繁に訪れていたご家族が顔をみせないとなると、入居者は不安になります。面会でできないご家族も不安です。私自身がかつて、母を別の施設にお願いしていたとき、インフルエンザなどで面会を制

限された経験があつて、その折の家族の不安や心配は、痛いほどわかるのです」

そこで、早速、さまざまな対応策を始めた。

従来から家族には定期的には、入居者の様子を撮影した写真を送つてはいたが、それに加えて、家族の希望を聞き、ビデオメッセージ、電話、手紙（文通）など、いずれかの方法により、入居者との交流を絶やさずにお願ひした。

すると、送ったビデオメッセージに家族からもビデオでの応答があつて、入居者もスタッフも感激した例があつたという。

緊急事態宣言解除後は、様子をみながら、予約のうえ、ガラス越しでの短時間の面会も可能にした。久しぶりの面会に「会えた、会えた」と涙ぐむご家族や利用者もいたという。里村さんたちは、なるべくこれまでの関係性を切り離さない努力をつづけた。

「高齢の方や認知症の方には、あまりストレスがかかりすぎると、新型コロナではない、別の悪影響が表れて、不安などから体調を崩す方も出てしまいます」

スタンダードが壊れた

もうひとつの問題は、マスクだった。そうではなくともコミュニケーション能力の低下しがちな利用者には、普段からスタッフは、言語による伝達に加え、表情やボディランゲージをフルに活用してきた。ところがマスクは、表情を隠し、その人が誰なのかの見分けも困難にする。